

ひとを育てる活動

支援した新校舎で児童の登校を待つパソコン5台

— 地震被災のブロールサロ村小学校 —



私たちの1月の緊急支援でとりあえず補修したヤシの葉の屋根とブルーシートの仮教室



父母が持ち寄った竹材と、当団体追加支援によるトタン屋根と角材で完成した4教室からなる新校舎

クリスマス寄付のおすそ分けで緊急支援の結果報告です。ヤシ屋根と周りをブルーシートで囲って仮教室ができましたが、届いた写真の教室は水浸し状態で、トタンなどの屋根材が必要と分かりました。年度末で予備費も残らない中の追加支援は難しいと考えていたところ、被災小学校の復旧担当が、元奨学生で今は村議のスヌーリアと知った会員から、応援したいとご寄付をいただきました。

ブロールサロ村の小学校は、当団体が長く支援するCMIPやSCMSIなどカトリック系私学と異なり公立です。教師給与は国から、学校敷地と校舎は地元政府（バランガイ）の責任です。住民から、がけ崩れ等の心配がない敷地の提供を受けて、恒久的校舎建設に取り掛かるまでには時間がかかりそうです。

さっそくトタン屋根と角材などの主な資材費の支援をしました。労務や側壁用竹材は父母が提供するなど、住民の協力を得てほぼ1か月で完成しました。

そして、3月下旬に予定していた卒業式用のステージの再建も近いという時に、このような山岳部にも新型コロナ問題対策の都市封鎖、子どもたちの登下校を含む移動制限の措置が適用されることになりました。

トタン屋根のおかげで、雨漏りの心配のなくなった新教室。既に休校に入ったためでしょう届いた写真報告には子どもたちの姿はなく、立派なパソコン5台が机の上に並んでいました。寄付を下さった会員に、この写真報告を送る際にも説明が必要と考えて、パソコンについて確認しました。フィリピンでは、コンピューター教育は小学校課程の必須教科で、写真のパソコンも教育省から支給されたものと分かりました。



山腹斜面の農業で生きるピラーンの子子どもたちが、ハイスクール、カレッジと進み、スヌーリアのように地域のために働く上でもパソコン教育は重要です。地震で無事だったパソコン用の教室支援もできてよかったです。念のため、電気が来ているか確認しました。学校も住民も電気が使えて、料金は村の補助で月100ペソ（約220円）ということでした。

レイクセブ町公立病院で働いています！

— 医師として地元に戻った奨学生アン —



計5年間の医大での勉学を終え、昨年10月には医師国家試験に合格のアン。チボリの仲間のために働きたいという初志を貫徹して、レイクセブ町の医師として住民の健康を支えています。

長期にわたり、高額の学費を支えてくださったのは、高知県在住の会員宮崎さんです。長い間お疲れさまでした。

また、医大のあるダバオ市での家賃他生活費については、チボリ民族初の医師誕生を期待して、レイクセブ町長による奨学金が支給されました。町の期待に応えて、信頼される医師として、チボリの人々、子どもたちの健康を守ってほしいと思います。

(写真提供：会員・相田さん)

教師たちに託すアグロフォレストリー事業の評価

— レイクセブ町の先住民族学校 ILS について —

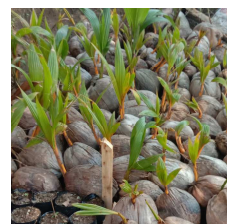
レイクセブ町のSCMSI校や公立校から遠く離れた南西部山岳地域で、「チボリの森保全」を教育理念にしている年少児童のための先住民族学校/ILS。2014年以降4年間に当団体がPFPと協働したアグロフォレストリー事業では、住民の組織化などを担当いただきました。一方、私たちも事業終了後に要請のあった学校農園用カラバオの寄付などを通じて、ILSを応援してきました。

そして、本年度2020年度は、上記のように2014年度以降に、ダグマ山系の一角レイクセブ町南西部で実施したアグロフォレストリー事業の評価活動をILSに委託することになりました。この計画を伝えると、ILS校長アニータ先生からは、苗木や子どもたちの写真などが届きました。ILS校で学んだ卒業生の中には、SCMSIデコロン・ハイスクールに進学した子どもがいるが、通学距離が長く、乗合バイク代が払えず中退が多いとのこと。そういう子どもたちに、シニアハイスクール農業科卒並みの技術習得をと苗木育成を教えているそうです。子どもたちと苗木を育てることが何よりの喜びというアニータ先生には、今回託したアグロフォレストリー評価事業でも、子どもたち、父母、教師との協働の成果を期待しています。



←先住民族学校戸外での給食タイム（帽子がアニータ先生）

→先住民族学校のココヤシ苗



コロナ問題で、私たちの教育支援パートナー・SCMSIやCMIPからの情報が遅れています。奨学生支援の皆様には入手次第お届けします。